

第一希有の行

江上浄信

一

宗祖聖人には数多い撰述がございますが、どの聖教を見ましても、そこには仏徳を慶嘆して報恩の誠を表わされることの他に意図があるわけではないのでありまして、古来、自信教人信真成報仏恩ということで撰述の意趣が語られてきた所以であります。勿論、そうには違いないわけですが、それぞれの聖教というものにありましては、やはり、自信教人信報仏恩をいまさらの如く深く感ぜずにはいられなかつた外縁というものがあると思っております。殊に『教行信証』を除いて多くの著述というものが、宗祖帰洛後、晩年に集中していることでもあります。

『教行信証』は、少なくとも寛元五年（七十五歳）には、著書としての形態を整えていたことを証する資料がありますけれども、関東在任時代から帰洛後、晩年に至るまで筆を加えておいてなるわけでありますが、その他の聖教は『浄土和讃』と『高僧和讃』が一具のものとして成立した宝治二年（七十六歳）から『弥陀如来名号徳』が著された文応元年（八十八歳）までの間に撰述せられているわけでありまして、そこには、既に指摘せられておりますように、宗祖帰洛後の関東教団の状況が大きな関わりをもっているのではないのかということでもあります。帰洛後の関東にありま

しては、宗祖という教団の中核を失なうことによって、幾多の門徒集団に分裂し、その門徒間におきまして信仰上の疑いが見られるわけです。そこには必ずしも純粹な信仰上の問題にとどまらずして、利害得失がからむ勢力の争いというところがあります。特に注意せられますのは、最も信頼されていた御長男であられました善鸞の義絶というところであります。最愛の、また期待をしておられた宗祖としまして、自分の長男を義絶してまでも、本願念仏の正法に誤ちがあつてはならないという願いが、晩年に多くの聖教というものを撰述されたのではなからうか。和漢に及ぶ多くの聖教には、そういう意趣が窺われるのではないだろうかと思つております。とくに関東の教団の異義というものに就きましては、先輩が既に注意せられておりますように、行信の問題が大きく関わつております。ことに念仏の行を軽んじ、信にのみ傾く偏信の傾向を厳しく教誡せられた事実については、今年安居を講ぜられました稲葉先生がすでに早くから注意せられているところであります。

ところで、多くの宗祖の御聖教を拝読して感ぜられますことは、大變不遜な言い方かもしれませんが、言語に敵密であり、非常に吟味せられて用いられているということですから。一つ一つの聖教の言葉というものが、深い領ぎをもち、確認をもって表わされているのであつて、そこに言葉の響き、重みというものを感ぜずにはいられないわけでございます。

題に掲げました「第一希有の行」という言葉は、宗祖のお聖教の中でも数少ない言葉の一つではなからうかと思つます。その一方では繰返し用いられている言葉も少なくありません。第一希有の行という言葉は、和語のお聖教の中には見られないわけでございますして、直接見られますのは『愚禿鈔』上・下巻にそれぞれ一箇所、それから言うまでもないことですが、『教行信証』「行巻」に引用されている龍樹の『十住毘婆沙論』の「地相品」の中に見られるところのものでございます。しかも、『愚禿鈔』上巻にありましては、細註の形式で細い字をもって書かれております。

これは高田専修寺に蔵される顕智上人の自筆で、最も古い『愚禿鈔』の書写本を見ましても、その他の書写本を見ま

してもそうです。顕智上人書写本は終始謹嚴な筆蹟であり、原本の一行の字数にまで注意して『愚禿鈔』の原形を忠実に伝えようとした記入標記がいたるところに見られるもので、「第一希有之行也」は、「第一」、「希有」、「之行」、「也」と四行に書かれています。『愚禿鈔』下巻には他の普通の文字と大きさは同じでありまして、第一希有之行と書かれています。

『愚禿鈔』におきまして、奇異に感ぜられますことは、愚禿のこの身の真実の救いの確かめが、「選択本願真実報土 即得往生」の順序で重点的に説かれておりますけれども、「選択本願念仏」そのものが直接説かれていないのではないかといいことです。『歎異抄』第二条には、有名な「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」と、宗祖は自ら元祖の教学をそのまま承けられたことを表明し、しかも元祖を一步も出ないということを常に強調せられているわけです。しかもこの浄土真宗の開祖を必ず元祖法然上人に帰しておられます。そういった幾多の証文、例えば『和讃』には

智慧光のちからより

本地源空あらわれて

浄土真宗ひらきつつ

選択本願のべたまう

と示し、「正信偈」には「真宗教証興片州選択本願弘悪世」とおっしゃって、真宗の興行を元祖の功に帰し、『教行信証』後序には、『選択集』相伝の感激を言葉に極めて喜ぶとともに、『選択集』そのものを、「真宗の簡要、念仏の奥義、これに撰在せり。見る者論り易し。誠にこれ、希有最勝の華文、無上甚深の宝典なり」と讃嘆せられておるわけです。そういう点に関して、選択本願の念佛が信心具足の念仏であり、仏回向の大道であることを宗祖の領解を通して表わされたものが第一希有の行であると思うのです。

御存知の通り、法然上人が、『十住毘婆沙論』というものは傍明往生浄土の教に属するものだと『選択集』のはじめの「教相章」におっしゃっておいでになります。先輩の指示によりますならば、この『十住毘婆沙論』が正依の經典、浄土の三經を論議したのではなく、とくに『華嚴經』『十地品』の積であること、またそこに説かれる易行称名というものは十方諸仏に通ずる称名で、一向専念無量壽仏ではないこと、或は不退を求めること急であって、必ずしも往生浄土の心が顕著でないというように言われるわけがあります。

ところで宗祖は、この龍樹を相承の第一祖に当てられておりました、「正信偈」、「文類偈」の龍樹章の初めには『楞伽懸記』の文をもって仏の正意を顯わすものであるというふう述べられ、「文類偈」におきましては、「造十住毘婆沙論難行險路特悲憐易往大道広開示」とおっしゃっているのです。恐らく宗祖は第九「易行品」に、この『論』の意というものを見出されたに違いないのであります。「易行品」の弥陀章というものは明らかに『大經』によられたもので、「阿弥陀仏の本願を憶念すること是の如し。若し人、我を念じ名を稱して自ら歸すれば即ち必定に入る」と示されているのです。従って諸仏の称名を説きつつ、弥陀章では弥陀仏名の称名に帰一せしめていられるわけであります。このように龍樹の本意が「易行品」にあるとしますならば、この『十住論』というものは、正に仏の正意を顯わすものと言わなければならないわけです。

『十住論』の正明傍明ということにつきましては、雲澗院師は三義を立てられています。(1)能説では「十地品」の積であるから傍明であり、所詮の義では「易行品」に撰して正明論となる。(2)「易行品」を前後の諸品に撰めれば傍明となり、前後の諸品を「易行品」に撰めれば正明論となる。(3)「易行品」の弥陀章には、「本・仏道を求むる時、諸の奇妙事を行す、諸經の所説の如し」と言って難行そのものは弥陀因位のものであるということから正明論であるという言い方をしております。まことに明快であると言わなければなりません。このことにつきましては本学の学長松原先生が『親鸞の末法思想』の中でも龍樹を初祖とする所以をお述べてなっています。

『教行信証』の中では『十住毘婆沙論』の引用は、「行巻」にせられます。言うまでもなく称名破満の徳、称名転積というものが述べられまして、以下三国七祖の釈が連引されてきます。『十住毘婆沙論』は四文引用されているわけで、始めは「入初地品」、それから「第一希有之行」という言葉があります「地相品」、更に「淨地品」「易行品」と、四品引用せられてくるわけです。ここでは特に、その「地相品」を中心として考えてみたいと思うわけです。

二

坂東本『教行信証』を見ますと、この「地相品」は「入初地品」と一連の形をとって引用せられている。と申しますのは、行を改めることなく連続して引用されていることでもあります。このことにつきましては、香月院が、「又曰く」とも「乃至」とも言っていないから「入初地品」と連続しているものと理解すべきであると言っています。この「地相品」は大きく二つからなるわけです。一つは歓喜の所由を明かす文、歓喜の意味について述べるところです。二つには歓喜の相異について述べるところです。歓喜の所由については、煩わしいかと思いますが、文に沿うていきたいと思えます。

初歓喜地の菩薩が初地にあって歓喜が多いから多歓喜と名づけられるのであるが、それは「入初地品」に六波羅蜜・四功德処等の無量の功德を具えるからであると言っています。しかし諸の功德を具えて歓喜が多いと言うならば敢えて初地だけに限るものではない。二地・三地も同じであるべきなのに、特に初地に限って歓喜地と名づけたのは、それ相当の理由がなければならぬというわけです。そして宗祖は、「法として歓喜すべし」と言うべきところを、「法を歓喜すべし」と読んでおられる。そうしますと、少くとも歓喜される内容があるべきであるという解釈になるうかと思えます。これに対して答えているわけですが、「答えて云く、常に諸仏および諸仏の大法、必定、希有の行を念ず。このゆえに歓喜多し」というように読むべきところであります。そうしますと、この場合の必定は『論』の

意から言いますと必定の菩薩の意味です。ですから、常に(1)諸仏を念じ、(2)諸仏の大法を念じ、(3)必定の菩薩を念じ、(4)それから希有の行を念ずるという意味であります。それを宗祖は、返点を付け替えて「常に諸仏および諸仏の大法を念ずれば、必定して希有の行なり。このゆえに歓喜多し」と訓みかえておられる。ここでは「必定して」といい、「希有の行なり」と読まれていることが注意されなければならないと思うのです。このように訓み替えますと、初地の菩薩というものは常に諸仏及び諸仏の大法を念ずる。それでこの念ずる行は、まことに希有の尊い行である。念ずるという行が希有の行であることを強調せられたわけでありまして、このような希有の行なるが故に歓喜多しと宗祖は見られるわけです。このように諸仏及び諸仏の大法を念ずるという行は、必然的に歓喜をもたらすという因縁があるから、初地の菩薩というものは大いに歓喜が生ずるのであると言われるのであります。

そしていま、諸仏を念ずると言ったけれども、諸仏というのは、如何なる仏を指すのかと、まず然灯等の過去の仏、『大経』の方の五十三仏であります。次に阿弥陀等の現在の諸仏、弥勒等の未来に出世する諸仏、それらを念ずるのである。このような諸仏世尊を念ずれば、現にこの目前に在すように守護せられるのである。この仏たちは最も勝れた仏で、三界の第一である。この仏よりほかに勝れた仏はほかにない、それ故に歓喜多いのである。ここでは諸仏というものが、この弥陀一仏に摂められて、弥陀一仏と考えてみることが出来ると思ひます。

つぎの「諸仏の大法を念ずれば、略して諸仏の四十不共法を説かん」と、まず諸仏の大法を念ずるといふのは諸仏には無量の徳があるけれども、別してこれを言う時には、他の菩薩や聖者とは共にしないところの仏に限った功徳、他と共にしない特別なものを四十不共法の功徳というように言われまして、その中に四つあげておられるわけであります。(1)「自在の飛行意に随う」、(2)「自在の変化辺なし」、(3)「自在の所聞無閼なり」、(4)「自在に無量種門をもつて、一切衆生の心を知ろしめす」というように、四十不共法の功徳を四つだけあげて、後は「乃至」しておいでになります。しかしこの乃至の処は『論』文で見ますと、「是の如き等の法、後に広説すべし」と言う文であるわけです。そうし

ますと、念じたならば大行としての四種をはじめとする法徳が必然的に具わっていることを示されたものと窺われます。乃至された次の文は「念必定の諸の菩薩は、もし菩薩、阿耨多羅三藐三菩提の記を得つれば法位に入り無生忍を得るなり」と、宗祖は「念必定の菩薩」の念必定というのを菩薩の形容詞の形をとっておられるわけです。このことは、それを結びまして「念必定の菩薩と名づく」と言っておられますから明らかであると思うわけです。念必定の菩薩というのはどういう菩薩かと言えば、菩薩が無上の証の記別を得ると不退の位に入って無生忍という真如の理を証する智慧を得るのだから千万億の悪魔が来て障りを為しても破壊動乱することはできない。したがって、ここでは退墮することはない。このような菩薩は大悲心を得て大悲の行を行なう大人の法、菩薩の自利利他の法を成就するのであって、これを念必定の菩薩と名づけるのであるとおっしゃっています。

ここで念必定の菩薩と訓めましたのも宗祖の独自の見方でありまして、必定の菩薩につきまして『愚禿鈔』上巻には、「即得往生は後念即生なり」という下に細註をされまして「即の時必定に入る」文、「又必定の菩薩と名く也」文と記しておいでになりました、『大経』十一願成就の文の「即得往生、住不退転」を「即時入必定」というように説かれているから、それはこの文の必定の菩薩と名づくということを指しているものと窺えます。

念必定の菩薩ということにつきまして、先学は、無量力功徳を念じて必定に入る菩薩のこと、即ち一念発起入正定之聚というその人を指し、畢竟じて言えば、往相の行信を得る人に名づくるんだと言われていますが、返点、それから送仮名を改められた宗祖の心には、他力念仏者というものが思われたということが感ぜられるわけであります。

次に、希有の行を念ずるといふのは、必定の菩薩が第一希有の行を念ずることをいふことである。第一希有の行といふのは一切凡夫が行ずることは到底思いも及ばない。一切の声聞や辟支仏でさえ、それを行ふことが出来ない。このような希有の行であるから、これを念じて菩薩は歓喜を生ずるのである。というように言ひまして、次に「仏法無閼解脱および薩婆若智を開示す」と言われます。無閼といふのは障りが無いということでありまして、無始已来障

りを為してきた煩惱というものが、無閼道で断ぜられることによって障りとならない。解脱は解脱道で、煩惱を解脱したところである。そこで無閼道で煩惱を断じ解脱道で煩惱を離れる、それがこの仏になったところであって仏法無閼解脱と言われます。それから薩婆若というのは、サンスクリットの音写であって、仏智のことであります。般若の異名であると言われていますけれど、因位の菩薩では般若と名づけ、仏果を得たところでは薩婆若と言われる。それでいま、無閼道で一切の無明煩惱を断じて尽して解脱道で仏果を証し、薩婆若智を開示すると言っているわけであります。この歓喜地の菩薩が第一希有の行を念じて、いよいよ仏になると決って不退の位に至るから、薩婆若智の仏果が開き現れるというように言っています、更に十地の諸の所行の法ということにつきまして述べているわけであります。それは十地の菩薩の修する六波羅蜜・十波羅蜜の行のことでありまして、第一希有の行の内容というのが示されています。不退の菩薩というものは、十波羅蜜の行というものを修し、それを念ずるから心に歓喜が多い、という意味で心多歓喜と名づけると言っております。

更に問答が重ねられまして、歓喜地の有無につきまして、凡夫の身で未だ発心してないもの、それから発心しても初歓喜地を得ないもの、そういうものがあって、そういった人も諸仏及び諸仏の大法を念じ必定の菩薩、及び希有の行を念じて、また歓喜地を得るはずである。このような場合に菩薩の歓喜と初地の菩薩の歓喜とどのように違うのかと問うています。それに対しまして、初地を得た必定の菩薩が諸仏を念じたならば、諸仏の量りない功德というものを自分も得ることが出来るに違いない。というのは、自分は已に初地を得て必ず成仏するに違ないと定まった菩薩の仲間に入っているからである。しかし他の者にはこのような心はない。だから初地の菩薩には多くの歓喜が生ずる。他のものは成仏するに違いない心がないから歓喜というものが多くない、ということを言っています、転輪聖王の王子のことを譬えまして、そのことを更に説明しています。

いささか煩わしいと思いましたが、「地相品」を見てきたわけでもあります。恐らく宗祖の心というものは、念仏の
大行に生かされた他力行者というものを示そうとされたのではないか。『論』の当面からしますならば、第一希有の
行ということは龍樹の諸の所行の法で、布施・持戒等の十波羅蜜の行であるけれども、念必定の菩薩というものが他
力行者・正定聚不退転に住した信心の行者として理解されるとき、その第一希有の行というのはどういう意味を持
つのであろうか。『愚禿鈔』には、「本願一乗は、頓極・頓速・円融・円満の教なれば、絶対不二の教・一実真如の
道なり、と知るべし」というように言われ、更に「專が中の専なり、頓が中の頓なり、真の中の真なり、円の中の円
なり、一乗一実は大誓願海なり」と、そうして大誓願海の下に初めに申しました「第一希有之行也」という文字が四
行に細註せられているわけです。

宗祖の撰述については、經典の語句に含まれる意味内容というものをどこまでも拡充し発展して、余すところなく
汲み取ろうとせられる手法がみられるわけでもあります。とくに経釈の上に跡付けることによって、その教法の伝統と
いうものを明らかにせられようと思われたいわけであり、また教法というものがかく一つの語句によって一方
的に局限されて理解されるということを防めるとともに、諸種の用語を引示して豊かな内容というものを解明しよう
と努められたように思われます。

ここで本願一乗というように言われてきますが、本願の語は『愚禿鈔』にはしばしば見られます。しかし本願一乗
と言っておられる一乗という名につきましては未だ見られなかったものでありまして、『愚禿鈔』上巻においてはこの
一乗ということが初めてでございます。しかもここに至って、初めて私釈と引文を合わせて四遍に及んでいます。一
乗は聖道諸宗の共通の称号であります。それをもって、とくに選択本願の横超道こそ頓教横超そのものであるとの宣

言であるといつていいと思います。しかもそれはよきひと法然上人の浄土宗というものの一代仏教における明確な位置づけの確認であったというように思われます。しかもここでは頓極といい頓速といい、円融・円満・一実真如というような言葉が用いられておりますけれど、こういった言葉は言うまでもなく、広く諸宗においても用いられている用語であります。

宗祖は先程申しましたように、一方的に局限された理解のしかたにとどまらないだけでなく、『愚禿鈔』の上下両巻の初め「賢者の信を聞き、愚禿が心を顯す」と言われますように、助正間難し定散心雜する自らの愚悪な自身の徹底した信知のうえに一語一語というものが領かれ体認されている。それは愚禿の救いの感激の表白であると見ることが出来ますし、終りにありましては「応知」と言われております。「応知」という言葉は『教行信証』等にもそうですが、繰返し宗祖が私積の語尾に用いられているのであります。こういったどこまでも深く経積を信知される敬虔な態度を仰がずにはいられないのです。かかる根本姿勢から選びとられ、表現されるものが次に「專が中の專なり、頓が中の頓なり、真の中の真なり、円の中の円なり、一乗一実は大誓願海なり。第一希有の行なり」であり、それは選択本願の行、念仏の不行を指すのである。更には、「金剛の真心は、無碍の信海なりと、知るべし」と信の絶対を示して私積を結んでおいでになります。これは正しく選択本願の行信というものにほかならないわけであります。

ことにこれを『教行信証』に配当しますならば、その中核でありますところの行信両巻であることは言うまでもないことでありまして、この「專が中の專なり」等の文は、「化身土巻」の本巻に「横超とは、本願を憶念して自力の心を離る。これを横超他力と名づくるなり」と言われまして、「これすなわち專の中の專、頓の中の頓、真の中の真、乗の中の一乗なり、これすなわち真宗なり。すでに『真実行』の中に顯し畢りぬ」と言われますものと対応するものであります。ただ「化身土巻」では「乗中之一乗」が、『愚禿鈔』では「円中之円」になっていきます。「円中之円」と言うのは、「本願一乗は、頓極・頓速・円融・円満」の円融・円満を承け、一乗一実は先の本願一乗と真如一

実という、そういったものを承け、その一乗一実を結んで大誓願海という四字に結ばれてくるわけです。「行巻」の一乗海積の終りであります。ただこれ、誓願一仏乘なり」(『真宗聖典』一九七・八頁)と言われている絶対不二の奥義の宣言がここに表わされているのではないかと思います。

四

初めにも申しましたが、「第一希有之行也」という『愚禿鈔』上巻の文は、細註の形で書かれているわけです。これについて、五乗院宝景師は『愚禿鈔講義』に『十住毘婆沙論』を随宜転用されたものであるから細字に書かれたという末疏があるけれども、そうではないんだということと縷々「地相品」の文をもって説き明かそうとしています。細註というものは、上來述べてこられました言葉をより明確に領ぎ徹底されたものであると見ていいのではないかと、またそう見るべきではないかと思えます。とくにこの『愚禿鈔』におきましては細註が到るところに見られるわけで、浄土教に伝統せられ確立されてきた教判を表わされる上巻の主題は、「横超 選択本願 真実報土 即得往生也」とかかげる横超の仏道を明らかにするものでありますが、その「選択本願 真実報土 即得往生也」は細註されたものであり、その選択本願を浄土三經に確かめていくについても、綿密な細註がほどこされており、また真実報土を中心として仏土を明示するについても、「仏土について二種あり」と言われまして、「一には仏、二には土なり」というように細註されております。その仏を承けて「仏について四種あり」といって、「一には法身・二には報身・三には応身、四には化身なり」と細註をもって表わされています。法身についても「一には法性法身・二には方便法身なり」ということで細註され、その他枚挙にいとまがないほどであります。

細註せられているということは、何か軽視せられたという印象をも受けるかと思いますが、その宗祖の態度・姿勢

というものを見ますと、そこには、愚禿が救われてゆくそういった中で、の顔きというものの、恩厚というものが表わされているのだと思うわけであります。「第一希有之行也」というものは、「化巻」の横超積の結びに、「已に真実行の中に顕わし畢ぬ」と細註されたものと、その意を同じうするものであり、「行巻」の「超世希有之勝行」と同意に見られると思いますし、非常に大事な文であります。

敢えて「第一希有之行也」と言わずに、例えば他の言葉であってもいいのではないか。「行巻」には「円融真妙之正法、至極無碍之大行」と言われている、そういった言葉であってもよかったのではないか。それを敢えて「第一希有之行也」と龍樹の言葉をもってこられたということは、それが仏回向の行として、行そのものが仏の行であり、それこそ浄土真実の行であり、選択本願の行、即ち念仏の行であることを表わそうとされたのではないだろうか。この第一希有の行を説ける龍樹こそ浄土真宗の第一祖なんだという意趣があると見たいのです。

ところで『愚禿鈔』下巻にも第一希有の行という文があります。それは善導の二河白道の「汝一心正念」の言葉を釈しまして、「汝の言は行者なり、これすなわち必定の菩薩と名づく、龍樹大士の『十住毘婆沙論』に曰わく即時入必定となり。曇鸞菩薩の『論』には入正定聚之数と曰えり。善導和尚は希有人なり・最勝人なり・妙好人なり・好人なり・上人なり・真の仏弟子なりと言えり。一心の言は、真実の信心なり。正念の言は、選択摂取の本願なり・また第一希有の行なり・金剛不壊の心なり」というように正念を明かしてくるところであります。それを見ますと、必定の菩薩というのは他力信心の行者のこととなり、第一希有の行というのは選択摂取の本願の名号であります。しかもそれは念仏行者の南無阿弥陀仏となっています。名号というのは選択本願の名号であり、そのまま行者の念仏であります。そして名号こそは第一希有の行であることを『愚禿鈔』は明示していると思っております。そうしますと、称名破満に続きまして、宗祖が「行巻」に「称名はすなわちこれ最勝真妙の正業なり。正業はすなわちこれ念仏なり。念仏はすなわちこれ南無阿弥陀仏なり。南無阿弥陀仏はすなわちこれ正念なりと、知るべし」(『真宗聖典』一六一頁)

と転釈せられた、それを承けるものが第一希有の行であるというように言えると思わなければなりません。

しかしながら、このような第一希有の行の深いうなづきは、吉水入室の際、雑行を棄てて本願に帰した他力の信心が弘願真実であったればこそであり、もしそうでなかったならば、「今特り方便の真門を出でて選択の願海に転入す」という自覚もなかったでしょう。選択の願海の深さに感激すればするほど、その願海に転入せしめる善巧として、万行諸善の仮門と方便真門とが意味深く感ぜられたに違いないからであります。したがって、「久しく万行諸善の仮門を出でて」「善本徳本の真門に廻入し」たのも、「今特り方便の真門を出でて選択の願海に転入」したのも、善巧の深さが定散の自心に昏い自己を照し、そこに永く久しく定散心にしばられた業苦の身を感じせられたからに外ならないのです。三願転入の告白にあたって「助正間雜し定散心雜す」る自己を凝視して「微塵劫を超過すれども仏願力に帰し亘く、大信海に入り亘し。良に傷嗟すべし、深く悲歎すべし」と悲傷されております。しかもこの定心が仏智を了知しない所以を「本願の嘉号を以て己が善根となすが故に信を生ずること能はず、仏智を了らず彼の因を建立することを了知すること能はざるが故に、報土に入ることなきなり」と告白されていることを見忘れてはならないと思います。五乗院師が第一希有の行について、第一を歎仏偈の国土第一の第一であり、希有の行とは難値難見難得難聞の行と領解した意味が深く思われます。

宗祖にとって第一希有の行は、関東の同朋教団の信仰の紛乱を契機として、選択本願の念仏、それこそ煩惱具足の凡夫が救われていく大行に他ならないということを再確認し聞思せられた表白の言葉ではなかろうかと思うわけです。

（本稿は昭和五十四年十月三十一日の真宗学会大会に於ける講演の筆録を先生に加筆・整理していただいたものである。）